

## 願勝寺・阿波内侍 関連レポート

### 京都に「願勝寺」は存在しなかった！

#### 「願勝寺」の名は崇徳天皇の「成勝寺」に由来か

よく調べたところ、京都の安井金比羅宮が「願勝寺」と呼ばれたことはありませんでした。

崇徳上皇が、宮仕えしていた阿波内侍に、現在の安井金比羅宮の場所に邸宅を与えたことは確かですが、当時この場所は「藤寺」と呼ばれていました。のちに「勸勝寺」となりますが1177年のことでした。願勝寺でお見せいただいた史料(原稿用紙に万年筆書きのもの)によれば、美馬の維摩寺を「願勝寺」にしてほしいと阿波内侍が懇願したのは「六条天皇の仁安3年」すなわち1168年で、「勸勝寺」の命名より9年も前のことです。

「願勝寺」や「勸勝寺」の名前の由来として崇徳天皇が在位中に建立した六勝寺の1つ「成勝寺」にちなんで1字をとったものではとの推察が挙げられます。

※「成勝寺」について

<http://blog.goo.ne.jp/mitsue172/e/2f551a3feb453024b2ea5809cc933722/>

→従いまして、「京の願勝寺を母の生国の阿波に移し維摩寺改め願勝寺としました。これが現在の願勝寺のはじまりです。」という美馬市ホームページの記載は、誤りです。

<http://www.city.mima.lg.jp/kankou/kankouannai/miru/0012.html>

※願勝寺ご住職のお力で修正依頼ができるのであれば、表現を変更していただくのが妥当と感じられます。

#### 【阿波内侍と「藤寺」⇒「勸勝寺」⇒「安井金比羅宮」の名称変遷 年表】

1146年 今の安井金刀比羅宮の前身である「藤寺」に、阿波内侍が居住

1156年 保元の乱。崇徳上皇、讃岐へ。

1159年 平治の乱で阿波内侍の父・藤原信西自殺の上に斬首、藤原信頼も斬首(平家、一人勝ち)

1160年 源義朝没。頼朝、伊豆へ流される。

1163年 崇徳上皇、象頭山松尾寺金光院(讃岐の金毘羅宮の前身)に参籠

1164年 崇徳上皇、讃岐で崩御

(同年?) 阿波内侍、藤寺の観音堂に上皇の御髪を祀る

御陵が造営され、近くの白峰寺が菩提所となる

1165年 上皇が参籠していた象頭山松尾寺金光院でも崇徳上皇を合祀

阿波内侍出家し寂光院へ入寺、証道比丘尼となる

1166年 阿波内侍の母逝去

1167年 平清盛が太政大臣に

1168年 美馬維摩寺を「願勝寺」にしてほしいと阿波内侍が懇願

1176年 建春門院・高松院・六条院・九条院が相次いで死去。

※後白河法皇に近い人々が相次いで死去したことで、崇徳上皇の 怨念が意識され始めた。

1177年『愚昧記』安元3年5月9日条に「讃岐院(崇徳上皇)ならびに宇治左府(藤原頼長)の事、沙汰あるべしと云々。これ近日天下の悪事彼の人等所為の由疑いあり」とある。

(同年) 藤寺のお堂に大円法師がお詣りされた際に、崇徳上皇が御姿を現す。それにより、後白河上皇があらたにお堂を立てて、「藤寺」あらため、光明院「観勝寺」とする。

1184年『吉記』寿永3年(年)4月15日条に藤原教長が崇徳上皇と藤原頼長の悪霊を神霊として祀るべきと主張していたことが記されている。

1185年 壇ノ浦の戦い

1186年 後白河院の大原御幸

1214年 建礼門院徳子、亡くなる

1467～1477年 応仁の乱。光明院「観勝寺」焼ける。

1695年 光明院観勝寺の跡地に、太秦安井の蓮華光院が移築される。鎮守として讃岐の金刀比羅宮の前身であるより象頭山松尾寺金光院より、大物主神、崇徳上皇をご勧請。合わせて源頼政公もお祀りする。

1868年 京都に白峯神宮が建立される(讃岐の白峯寺の御神像を遷す)

(同年) 神仏分離令を受けて、讃岐の象頭山松尾寺金光院が「金刀比羅宮」と改称される。

(同年?) 京都では同じように神仏分離令のあおりで蓮華光院と鎮守社が分断され、蓮華光院が廃されて鎮守社だけが残存。安井神社の名称がのちに「安井金刀比羅宮」とあらためられる。

## 阿波内侍が美馬・維摩寺を選んだ理由

美馬・願勝寺で見せていただいた史料の中に、阿波内侍の母系「麻植(おえ)忠光」とありました。

藤原信西の Wikipedia によれば阿波内侍の母は藤原朝子で、「父が紀伊守であったことから紀伊局と呼ばれるようになった」とあるので、おそらく阿波内侍の母系の祖父が「麻植忠光」なのでしょう。

麻植氏は、阿波の忌部氏の末裔の忌部神社大宮司家麻殖氏から来ているそうで、やはり願勝寺に残る万年筆書き史料によれば、維摩寺の沿革のはじめに「当時歴代系譜によれば忌部岩木宿弥菩提の」とありましたから、維摩寺が母方の菩提寺だったのではないのでしょうか。

なお、天皇が即位するときの大嘗祭で、アラタエという特別な麻をお召しになります。そのアラタエを一子相伝で献上しているのが忌部氏。南北朝で忌部氏が南朝側についたことから明治維新までアラタエを献上できない時期があったようですが、明治以降は忌部氏の末裔の三木家が献上しています。

<http://www.honmono-m.com/asa/entry7.html>

追記ですが、崇徳上皇には暗殺説があり、御陵のある坂出市ではその説を採用しています。偶然かもしれませんが、二条天皇に命じられて暗殺者となったのが、「三木氏」でした。

(坂出市ホームページ「柳田(やなぎだ)」の項)

<http://www.city.sakaide.lg.jp/soshiki/bunkashinkou/sutokujyoukou.html>

### 柳田(やなぎだ)

JR予讃線沿いに、小さな石碑の建っているところがあります。ここは柳田といわれ、崇徳上皇が殺害された所だといわれています。

崇徳上皇は長寛二年に崩御しますが、その死因について『保元物語』や『平家物語』等には特に記述がありません。ただし、江戸時代の地誌である『讃州府誌(さんしゅうふし)』には二条天皇が上皇の暗殺を命じ、三木近安(みきちかやす)という武士が鼓岡を襲撃したということが記されています。近安の襲撃を逃れた上皇は、大きな柳の樹の穴に隠れましたが、その隠れた姿が池の水面に映り、見つかって殺害されたとされて



います。

その後、この地に柳を植えても、枯れるばかりで決して育たなかったそうです。

## 阿波内侍は、質実剛健を絵に描いたような女性

### 「皇妃」ではなかった？

阿波内侍は、安徳天皇の生母・建礼門院徳子に仕え、保元の乱後はすぐに剃髪し、寂光院の二代目尼僧となっています(初代から500年の空白期間あり)。

壇ノ浦の戦い後に、安徳天皇を喪った徳子は長楽寺にて剃髪し、建礼門院として寂光院の三代尼僧となります。阿波内侍は生涯仕え、平家滅亡後は生活を支えるため、京都市中を行商して歩き、「大原女」の初代モデルとされています。また、「しば漬け」の考案者であったともいわれます。

阿波内侍の両親、藤原信西・藤原朝子夫妻は、保元の乱で崇徳上皇の敵方となった後白河帝の側近でした。母・藤原朝子は後白河帝の乳母でしたので、幼少から後白河天皇に仕えています。

阿波内侍が崇徳上皇に仕えたのも、母が崇徳天皇の弟の乳母だったからと考えられます。結果、崇徳上皇に気に入られ藤寺(いまの安井金比羅宮の場所)に居を構えてもらっていたのは確かです(上皇崩御のあと御髪を受け取り安井金比羅宮の脇にある御堂にお祀りした記録がある)。

しかし、「皇妃」という立場であったかは定かではありません。美馬側の史料にしか「皇妃」との記録はなく、また崇徳上皇は讃岐配流時に第二夫人の近衛佐局と重仁親王を同行させおり、阿波内侍は母方祖先が美馬の忌部氏であるにもかかわらず、同行していません。

近衛佐局、重仁親王といわば「一家水入らず」のところへ、尼僧となった阿波内侍が「思いを寄せた」というのは考えづらいことです。

しかも、中宮(皇后)であった藤原聖子との仲も悪くなかったようで、保元の乱の前までは「常に一緒に行動していた」との記録もあります。

(Wikipedia「藤原聖子」の項より)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%97%A4%E5%8E%9F%E8%81%96%E5%AD%90>

保元の乱の後、崇徳院が讃岐国へ配流になった際に兵衛佐局が同行したのに対し、皇嘉門院が同行せずに都に留まったのは、立場の相違に由来するものであって、寵愛の程度によるものではない。たとえば、後世の後鳥羽上皇の配流に際しても、随行したのはそれほど身分が高くない女房で、院の寵愛篤い修明門院はお供していない。貴人の配流に際し、身の回りの世話をするために、近侍していた人々がお供をした。皇嘉門院(のように、只今の女院、かつて天皇の正妃・母后として中宮・皇太后の尊位にあった女性は、上皇とほぼ同等の身位にあり、上皇に随侍する立場にない。女院は、同行しないというより、通例では同行できないのである)。

また、「崇徳上皇は保元の乱の敵方を恨んではいなかった？」の項で後述しますが、重仁親王が22歳の若さで1162年に亡くなるのとおそらく前後して、崇徳上皇は配流先の讃岐鼓岡木ノ丸御所で国府役人の綾高遠の娘との間に1男1女をもうけています。(引用以上)

阿波内侍が維摩寺を「願勝寺」にと願ったのは、それらの出来事より5~6年も後であり、崇徳上皇の崩御からも3年を経たことです。

とすれば、「母方ゆかりの地に願勝寺を」と願った主たる理由として、世話になった崇徳上皇のご供養ももちろんあったのですが、むしろ年表中でいえば「母の死」や「平清盛が太政大臣に」なった直後であることのほうが浮かび上がってきます。

阿波内侍にとって保元の乱は、単にお仕えしていた崇徳上皇の敗戦配流という事態ではなく、両親が仕えた後白河法皇と、自身の仕える崇徳上皇との直接対決であり、非常に難しい苦渋の立場で前後の時を過ごしたに違いありません。

さらに3年後の平治の乱では、父・藤原信西が殺され、市中引き回しとなります。

平治の乱は、後白河法皇院政派と二条天皇親政派、あるいは藤原信西と藤原信頼という朝廷側近の争いとも見えますが、警護役である平清盛が「熊野詣に出かけた際に」起こっています。

平清盛は信西・信頼の双方と婚姻関係を結んで中立的立場にあり、二条親政派、後白河院政派どちらも距離を保っていたといわれますが、結果をみると、(清盛という護衛が不在だったために)信西は逃げそこなって殺害され、天皇と上皇を幽閉しクーデターを成功させたはずの藤原信頼、源義朝も、熊野から戻った清盛に天皇と上皇を奪還されて処刑され、平家一人勝ちで終わっています。つまり、熊野詣自体が、計算されたものであった可能性も感じとれます。

阿波内侍にとって清盛は、自身がお仕えする建礼門院の父でありながら、複雑な思いを抱かざるをえない相手であったかもしれません。

阿波内侍が「維摩寺を願勝寺に」と願い出たのは、平清盛が太政大臣となった翌年です。

保元の乱・平治の乱ともに、内情をよく知る立場にあったであろう阿波内侍。

歴史に書かれなかった彼女の真意を推測することは難しいですが、細かく年表をこしらえてみれば、「願勝寺」へ託したその思いは、「崇徳上皇へ寄せる思いだけでなかった」ことは、ほぼ明らかなのではないでしょうか。

## 崇徳上皇は、「逆賊」ではなかった可能性大

(保元の乱、崇徳上皇が一方向的に攻め込んだのではない)

(Wikipedia「保元の乱」の項目より)

### 挑発の開始

鳥羽法皇が崩御して程なく、事態は急変する。7月5日、「上皇左府同心して軍を發し、国家を傾け奉らんと欲す」という風聞に対応するため、勅命により檢非違使の平基盛(清盛の次男)・平維繁・源義康が召集され、京中の武士の動きを停止する措置が取られた(『兵範記』7月5日条)。翌6日には頼長の命で京に潜伏していた容疑で、大和源氏の源親治が基盛に捕らえられている(『兵範記』7月6日条)。法皇の初七日の7月8日には、忠実・頼長が莊園から軍兵を集めることを停止する後白河天皇の御教書(綸旨)が諸国に下されると同時に、藏人・高階俊成と源義朝の随兵が東三条殿に乱入して邸宅を没官するに至った。没官は謀反人に対する財産没収の刑であり、頼長に謀反の罪がかけられたことを意味する。藤氏長者が謀反人とされるのは前代未聞であり、撰閥家の家司である平信範(『兵範記』の記主)は「子細筆端に尽くし難し」と慨嘆している(『兵範記』7月8日条)。

この一連の措置には後白河天皇の勅命・綸旨が用いられているが、実際に背後で全てを取り仕切っていたのは側近の信西と推測される[9]。この前後に忠実・頼長が何らかの行動を起こした様子はなく、武士の動員に成功して圧倒的優位に立った後白河・守仁陣営があからさまに挑発を開始したと考えられる。忠実・頼長は追い詰められ、もはや兵を挙げて局面を打開する以外に道はなくなった。

## 崇徳上皇の脱出

7月9日の夜中、崇徳上皇は少数の側近とともに鳥羽田中殿を脱出して、洛東白河にある統子内親王の御所に押し入った。『兵範記』同日条には「上下奇と成す、親疎知らず」とあり、重仁親王も同行しないなど、その行動は突発的で予想外のものだった。崇徳に対する直接的な攻撃はなかったが、すでに世間には「上皇左府同心」の噂が流れており、鳥羽にそのまま留まっていれば拘束される危険もあったため脱出を決行したと思われる。白河は洛中に近く軍事拠点には不向きな場所だったが、南には平氏の本拠地・六波羅があり、自らが新たな治天の君になることを宣言して、北面最大の兵力を持つ平清盛や、去就を明らかにしない貴族層の支持を期待したものと推測される。

## 両軍の対峙

10日の晩頭、頼長が宇治から上洛して白河北殿に入った。謀反人の烙印を押された頼長は、挙兵の正当性を得るために崇徳を担ぐことを決意したと見られる。白河北殿には貴族では崇徳の側近である藤原教長や頼長の母方の縁者である藤原盛憲・経憲の兄弟、武士では平家弘・源為国・源為義・平忠正(清盛の叔父)・源頼憲などが集結する。武士は崇徳の従者である家弘・為国を除くと、為義と忠正が忠実の家人、頼憲が摂関家領多田荘の荘官でいずれも忠実・頼長と主従関係にあった。崇徳陣営の武士は摂関家の私兵集団に限定され、兵力は甚だ弱小で劣勢は明白だった[10]。崇徳は今では亡き忠盛が重仁親王の後見だったことから、清盛が味方になることに一縷の望みをかけたが、重仁の乳母・池禅尼は崇徳方の敗北を予測して、子の頼盛に清盛と協力することを命じた(『愚管抄』)。白河北殿では軍議が開かれ、源為朝は高松殿への夜襲を献策する[11]。頼長はこれを斥けて、信実率いる興福寺の悪僧集団など大和からの援軍を待つことに決した。

これに対して後白河・守仁陣営も、崇徳上皇の動きを「これ日來の風聞、すでに露頭する所なり」(『兵範記』7月10日条)として武士を動員する。高松殿は警備していた源義朝・源義康に加え、平清盛・源頼政・源重成・源季実・平信兼・平維繁が続々と召集され、「軍、雲霞の如し」(『兵範記』7月10日条)と軍兵で埋め尽くされた。同日、忠通・基実父子も参入している。なお『愚管抄』『保元物語』『帝王編年記』には公卿が次々に参内したと記されているが、『兵範記』7月11日条には「公卿ならびに近将不参」とあり、旧頼長派の内大臣・徳大寺実能が軍勢出撃後に姿を現しただけである。大半の公卿は鳥羽法皇の服喪を口実に出仕せず、情勢を静観していたと推測される。

清盛と義朝は天皇の御前に呼び出され作戦を奏上した後、出撃の準備に入った。『愚管抄』によれば信西・義朝が先制攻撃を強硬に主張したのに対して、忠通が逡巡していたが押し切られたという[12]。

## 夜襲

7月11日未明、清盛率いる300余騎が二条大路を、義朝率いる200余騎が大炊御門大路を、義康率いる100余騎が近衛大路を東に向かい、寅の刻(午前4時頃)に上皇方との戦闘の火蓋が切られた。後白河天皇は神鏡劍璽とともに高松殿の隣にある東三条殿に移り、源頼盛が数百の兵で周囲を固めた[13]。

戦闘の具体的な様子は『保元物語』に頼るしかないが、上皇方は源為朝が得意の強弓で獅子奮迅の活躍を見せ、清盛軍は有力郎等の藤原忠直・山田是行が犠牲となり、義朝軍も50名を超える死傷者を出して撤退を余儀なくされる。為朝の強弓は後年、負傷した大庭景義が「我が朝無双の弓矢の達者なり」(『吾妻鏡』建久2年(1191年)8月1条)と賞賛しており、事実であったことが分かる。なお『保元物語』には白河北殿の門での激闘が記されているが、実際には鴨川を挟んでの一進一退の攻防だったと推測される[14]。

攻めあぐねた天皇方は新手の軍勢として頼政・重成・信兼を投入するとともに、義朝の献策を入れて白河北殿の西隣にある藤原家成邸に火を放った。辰の刻(午前8時頃)に火が白河北殿に燃え移って上皇方は

総崩れとなり、崇徳上皇や頼長は御所を脱出して行方をくらました。天皇方は残敵掃討のため法勝寺を捜索するとともに、為義の円覚寺の住居を焼き払う[15]。後白河天皇は戦勝の知らせを聞くと高松殿に還御し、午の刻(午後0時頃)には清盛・義朝も帰参して戦闘は終結した。頼長の敗北を知った忠実は、宇治から南都へ逃亡した。

## 戦後

### 上皇方の投降

合戦の勝利を受けて朝廷は、その日のうちに忠通を藤氏長者とする宣旨を下し、戦功のあった武士に恩賞を与えた。清盛は播磨守、義朝は右馬権頭(後に左馬頭)に補任され、義朝と義康は内昇殿を認められた。藤氏長者の地位は藤原道長以降、摂関家の家長に決定権があり、天皇が任命することはなかった。忠通も外部から介入されることに不満を抱いたためか、吉日に受けると称して辞退している。

13日、逃亡していた崇徳上皇が仁和寺に出頭し、同母弟の覚性法親王に取り成しを依頼する。しかし覚性が申し出を断ったため、崇徳は寛遍法務の旧房に移り、源重成の監視下に置かれた。頼長は合戦で首に矢が刺さる重傷を負いながらも、木津川をさかのぼって南都まで逃げ延びたが、忠実に対面を拒絶される。やむを得ず母方の叔父である千覚の房に担ぎ込まれたものの、手のほどこしようもなく、14日に死去した(『兵範記』7月21日条)。忠実にすれば乱と無関係であることを主張するためには、頼長を見捨てるしかなかった。

崇徳の出頭に伴い、藤原教長や源為義など上皇方の貴族・武士は続々と投降した。上皇方の中心人物とみなされた教長は厳しい尋問を受け、「新院の御在所に於いて軍兵を整へ儲け、国家を危め奉らんと欲する子細、実により弁じ申せ」と自白を強要されたという(『兵範記』7月15日条)。

## 崇徳上皇は、平治の乱の敵方を恨んではいなかった？

(ニコニコ大百科「崇徳天皇」の項より)

<http://dic.nicovideo.jp/a/%E5%B4%87%E5%BE%B3%E5%A4%A9%E7%9A%87>

あまりにも恐ろしく悲しい崇徳上皇の最期だが、実際の上皇の晩年はそれとはかけ離れたものであったらしい。歴史物語「今鏡」によると、崇徳上皇は我が身の不遇を嘆くものの、保元の乱で対立した者達を恨むことはなく、ひっそりと亡くなったと記されている。怨霊説の発端は、平安時代の公卿・吉田経房の日記「吉記」にあるが、記述は崇徳上皇が亡くなってから数十年経ってからのことであり、話自体も伝聞なので信憑性には乏しい。

では、なぜ崇徳上皇＝怨霊が定着したかという、上皇が亡くなって約10年後、後白河上皇の身内が相次いで亡くなり、京の都では火災や強風(竜巻か?)が多発し、鹿ヶ谷の陰謀など社会情勢や治安が大きく乱れたことが最大の原因とされる。すなわち、崇徳上皇本人は菅原道真のように、生前は静かな晩年を送ったが、相次ぐ災害のせいで祟り神と見なされ、災害を鎮めるために鎮魂の対象になった。これに伴い、崇徳上皇は恨みを残して死んでいったという話が急速に広まり、菅原道真・平将門と共に日本三大怨霊と呼ばれるまで、恐れられる存在になってしまったのではないかとされている。考えてみれば、勝手に魔王とされてしまうなど、崇徳上皇にしても迷惑な話なのかもしれない。

(崇徳上皇 Wikipedia より)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B4%87%E5%BE%B3%E5%A4%A9%E7%9A%87>

『今鏡』『すべらぎの中第二 八重の潮路』では、「憂き世のあまりにや、御病ひも年に添へて重らせ給ひければ」と寂しい生活の中で悲しさの余り、病気も年々重くなっていったとは記されているものの、自らを配流した者への怒りや恨みといった話はない。また配流先で崇徳院が実際に詠んだ「思ひやれ 都はるかに おきつ波 立ちへだてたる ころぼそさを」(『風雅和歌集』)という歌を見ても、悲嘆の感情はうかがえても怨念を抱いていた様子はない。承久の乱で隠岐国に配流された後鳥羽上皇が、「われこそは にみじま守よ 隠岐の海の あらきなみかぜ 心してふけ」(『遠島百首』)と怒りに満ちた歌を残しているのとは対照的である。崇徳院は、配流先の讃岐鼓岡木ノ丸御所で国府役人の綾高遠の娘との間に1男1女をもうけている。

(先出、坂出市ホームページより)「姫塚」、「菊塚」の項

<http://www.city.sakaide.lg.jp/soshiki/bunkashinkou/sutokujoyoukou.html>

#### 姫塚(ひめづか)

雲井御所にお住まいになられたころ、崇徳上皇を気付かった綾高遠は、何かと不便があつてはならないと、自らの娘である綾の局(あやのつぼね)に上皇の身の回りの世話をするように命じたと伝えられています。

やがて、上皇と綾の局との間に皇子と皇女が誕生しましたが、幼くして亡くなられたと伝えられます。この姫塚はその皇女の墓であるとされています。

長命寺の西方にある田んぼの中にあり、現在はコンクリート壁に囲まれた中に石碑が建てられています。

#### 菊塚(きくづか)

崇徳上皇が雲井御所で過ごされていたときに、綾の局との間に皇子と皇女が誕生しましたが、上皇はこの皇子を顕末(あきすえ)と名付けられ、菊の紋をつけて綾の局の父、綾高遠に賜り、綾家の跡継ぎにされたと伝えられています。この皇子の墓は、府中町鼓岡の北にあり、菊塚の名称で呼ばれています。

石を積み上げた塚で、現在は民家の庭先に位置しています。

## おわりに

---

阿波内侍が美馬の維摩寺を「願勝寺に」と願った決定的な真意探り当てることはできませんでした。しかし、以下の点が浮かびあがってきました。

- ①「願勝寺」の名は「京にあった願勝寺」から来ているのではなく、崇徳上皇が天皇時代に建立した「成勝寺」に由来しているのではないかということ。
- ②維摩時が忌部氏ゆかりのお寺であり、彼女の母系が忌部氏末裔の「麻植氏」であったことから、母方の菩提寺であったのではないかという推測。
- ③阿波内侍が保元の乱の敵味方双方の関係人という苦渋の立場にあったこと。

保元の乱の3年後の平治の乱で父・信西を喪い、その5年後に世話になった崇徳上皇の崩御(暗殺?)の報を聞き、さらに2年後、母の死。翌年、平清盛が太政大臣に登りつめ、その翌年に「維摩寺を願勝寺に」と願い出ていることを思えば、願勝寺という名に彼女が託したものが少しだけ見えてくるのではないのでしょうか。

敵味方のはざまにあり、藤原家の出身で宮仕えする身分に生まれながら、尼僧となって行商に歩き、漬物をこしらえて建礼門院に生涯仕えた阿波内侍が「願勝寺」に託したもの——それは、身内でありながら敵味方となって憎しみあうことへの悲痛。のちの世に、それに尾ひれがついて(たとえば崇徳上皇怨霊説など)誤解

がひろがってゆくことへの怒り。ひいては、「争い去って平穏であれとの“願い”が“勝る”ように」との思いであったかもしれません。